

江戸城・江戸関係絵図解題シリーズ 1

本シリーズでは、科学研究費補助金・基盤（C）「近代国家模索の歴史的前提」（17K03094）及び、東京大学史料編纂所画像センタープロジェクト「江戸城図・江戸図・交通図および関連史料の研究」の成果の一部として、江戸城・江戸に関わる絵図の解題を随時公開していく予定である。
（両代表・杉本史子）

江戸御堀内図

【サイズ】全体法量 160.0 × 121.0cm（折畳時 25.0 × 15.8cm）

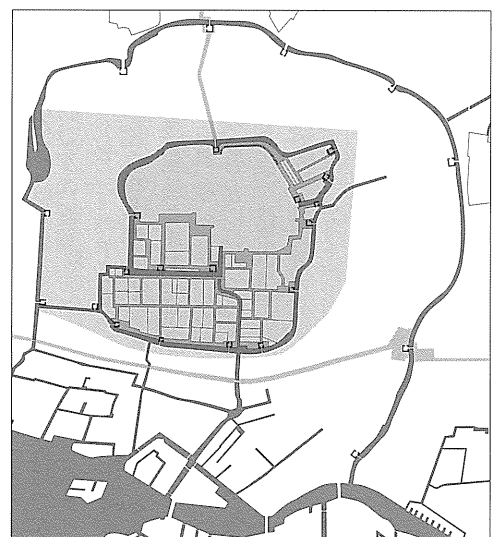
【形態・紙質等】一枚図、楮紙、手書彩色

【方位・縮尺記載】なし

【所蔵・伝来関係】東京大学史料編纂所維新史料引継本 I 1628

所蔵印「維新史料編纂会」

この図は、公家や御三家が江戸城に登城するという重要な儀礼の際の詳細な警備情報を、城内だけでなく、内郭を覆う、広い範囲について図示した（下掲の「江戸御堀内図」の図示範囲）を参照）ものとして、類例のない貴重な図である。内容年代は一七五九年より後を表していると考えられる（全体画像は図2として掲載）。儀式に伴う紅葉山の諸施設、本丸などに入る際の下乗下馬、吹上を中心とする警固配置、薄赤色で殿舎・多門・諸蔵・御用地等が図示されている。図余白に挿入された表は未完であるが、もともとの原図に記されたものか、書写時のものかという点については、今後の課題として残されている。



「江戸御堀内図」の図示範囲（グレー部分）

【表紙】「ミ印八番 江戸御堀内図」（表紙手書き題箋）

【内容年代】

図中北の丸に「宮内卿殿」と記載がある（図1）。宝暦九年（一七五九）九月二七日九代將軍徳川家重の二子萬次郎が首服して重好と名乗り、従三位左近衛中将に叙任、宮内卿と称し、清水徳川家の祖となり、同年一二月一五日清水新邸に移徙しているの、それ以後の図である。下限のてがかりはない。

ただし御玄関前御門の前に「公家下乗」、中仕切門の前に「御三家下乗」とある（図3）ので、公家が江戸城に登城し、同時に御三家も登城したときの図であることがわかる。宝暦一〇年以降の公家参向でまず想起されるのは、宝暦一〇年九月二日、一〇代將軍徳川家治の將軍宣下時である。このときは勅使・女院使のほか、右大臣鷹司輔平、内大臣九条道前ら多数の公家が東下し、江戸城大広間で行われた將軍宣下の儀式に参列している。このほか、宝暦一〇年正月二七日の新年祝賀、二月四日の將軍家重の右大臣任官、世子家治の右大将兼任、宝暦一一年三月六日の新年と継統（宝暦一〇年五月一三日

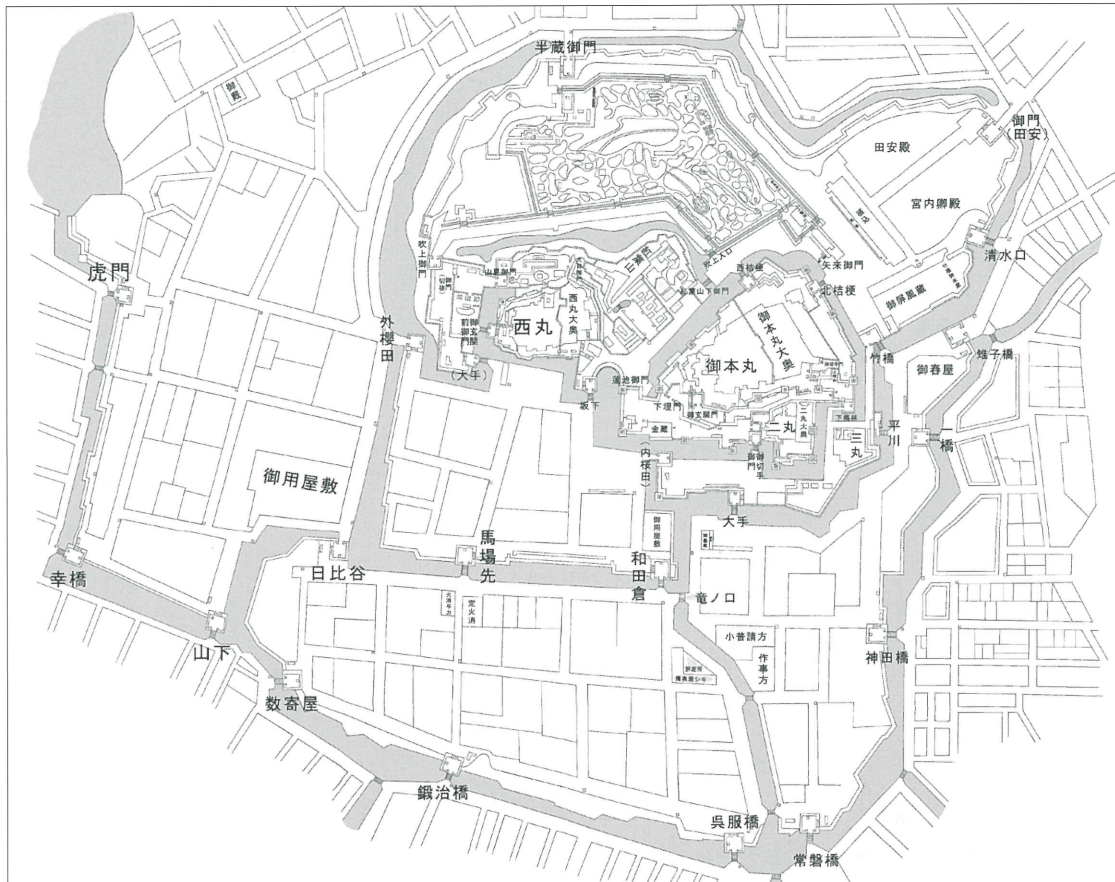


図1 全図トレース
(高橋喜子作成)

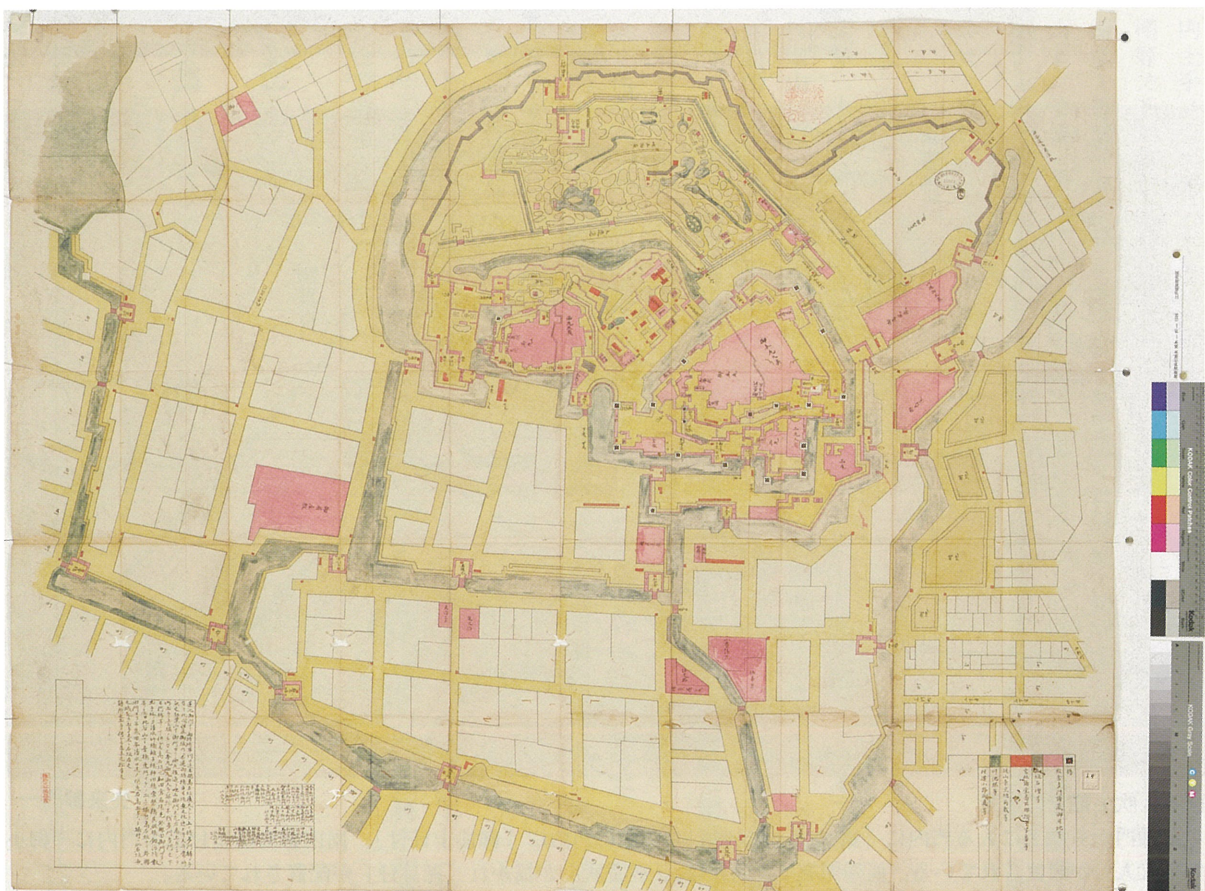


図2 全図

図3 本丸・二丸・紅葉山部分に加筆
御玄関前御門外に「公家下乗」、中仕切門の前に「御三家下乗」の記載がみられる。

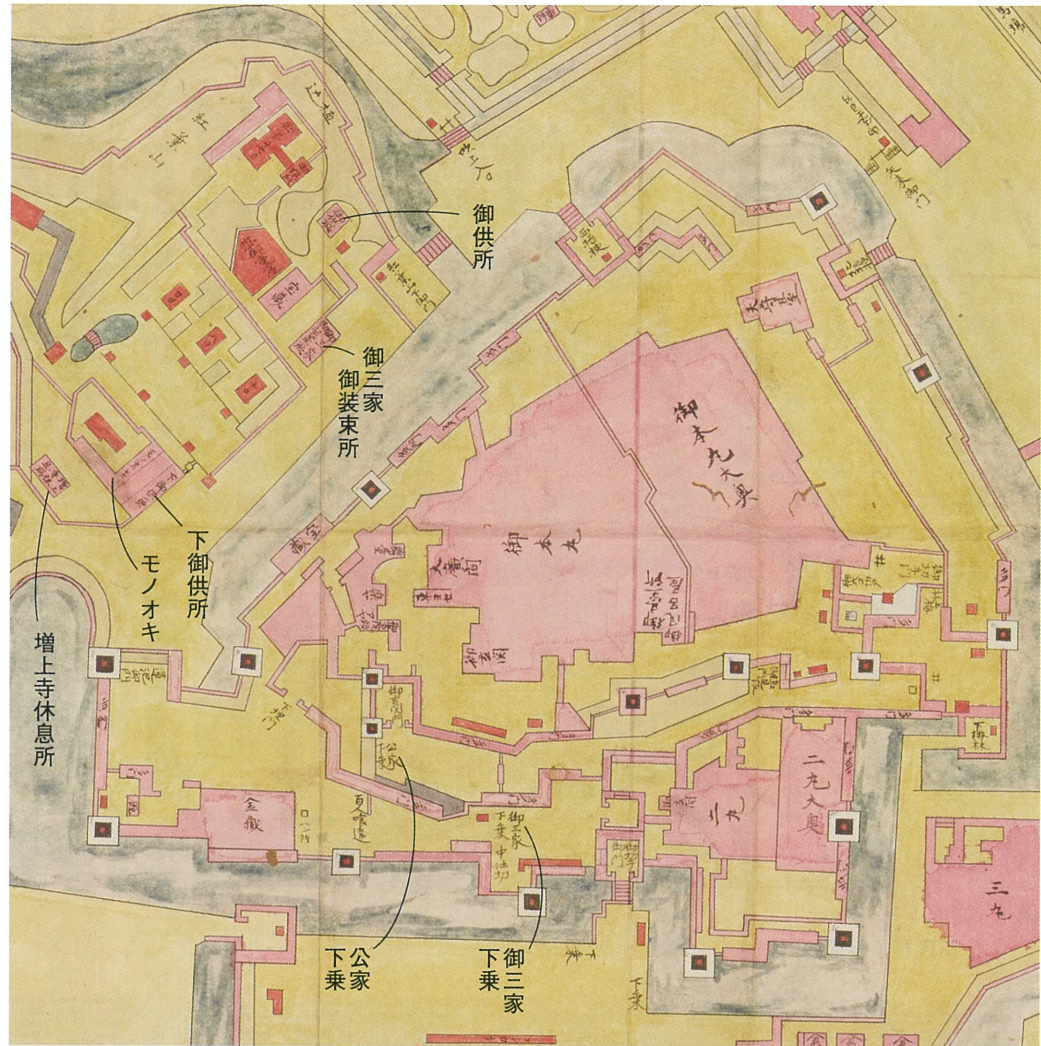


図4 吹上部分に加筆

矢来御門

半蔵御門から吹上に入る門内に「御目付・御徒頭」、矢来御門内に「御徒士目付」、園内御鳥部屋付近の門内に「御小姓与五人」が配置されている。西御門をでた角には、「西番所」が描かれ「御目付」が配置されている。

家重から家治へ代替わり」の祝賀、宝暦十一年七月二六日の家重の正一位太政大臣贈位贈官（家重は六月一二日死去）と、この頃公家の江戸城登城は度々に及んでいるが、新年祝賀の際には御三家は登城していない模様である。いまのところ、作成年代の特定はできないが、図の範囲が江戸城の城内、吹上、さらに内郭一円に及んでいるところからみて、將軍宣下か、官位昇進、贈位・贈官時など、大きな儀式が行われたときの江戸城の警備範囲・位置（色凡例の「十字番」は辻番か）を示した実用的な図ではないかと考えられる。

【凡例・序・跋等】

▼ 色凡例（図2右下）

黒四角枠内に赤色の記号―櫓、薄赤色―殿舎・多門・諸蔵・御用地等、灰色―石垣・石壇等、濃赤色―宮社・諸堂・番所・腰掛・十字番等、黄土色―堤・山・原・空地・前栽等、青色―川・池・堀等、薄茶色―往還・小路・御庭等

▼ 門一覧（図2左下）

本丸…大手御門（東下馬）、内桜田御門（西下馬）、大手三御門（或鉄門・或極楽橋御門・或御切手御門）、中仕切御門、御玄関前御門（或中雀門・或部屋口）、二丸御門（或銅御門）、上梅林御門、下梅林御門、平川口、西拈橋御門、北拈橋御門、上埋御門、下埋御門、蓮池御門
西丸…大手御門、中仕切御門、御玄関前御門、吹上御門、山里御門、梶木御門、大日御門、紅葉山下御門、坂下御門

その他…半蔵御門（或枯木）、田安御門、清水御門、竹橋御門、和田倉御門、馬場先御門（或明門）、外桜田御門（或吉凶門）、日比谷御門（橋御門）、常盤橋御門、神田橋御門、呉服橋御門、鍛冶橋御門、数寄屋橋御門、山下御門（姫門・鍋嶋門）、幸橋御門、虎御門

▼ 余白枠内記述（図2左下）

「蓮池御門ヨリ両拈橋・平川口迄之間、高石垣広大ニシテ、上ニ櫓・多門・堀ノ手有り、此間往来、御城内江不通、両拈橋、平生橋無之、此辺ヨリ天守當時無之、紅葉山下御門ヨリ、西丸後通り、吹上御門之左右、高土手ニシテ、

内土手ノ上ニ堀ノ手有之、本丸・西丸両大手堀端、不残多門、多門之下并門・櫓等ノ下、何レモ高石垣也、和田倉・馬場先・外桜田御門マテノ土手堀ノ方、清水・竹橋・雉子橋・神田橋・常盤橋・呉服橋・鍛冶橋・数寄屋・日比谷・山下・幸橋・虎門マテノ土手堀付、高石垣ナリ、外桜田門ヨリ半蔵・田安・清水口迄ノ間、左右高土手ニテ堀付ノ処、石垣無之、城之方土手之上ニ石垣有之、諸所之土手何レモ並木之松有之、」

【図中の主な文字記載】

▼ 本丸・二の丸、西丸、三丸、紅葉山、吹上御庭（図3・図4）

紅葉山には、「御供所」、「御三家御装束所」「下御供所」「モノオキ」「増上寺休息所」が記されている。吹上御庭には、半蔵門から吹上に入る門内に「御目付・御徒頭」、西番所に「御目付」、矢来御門内に「御徒士目付」、園内御鳥部屋付近の門内に「御小姓与五人」が配置されている。平川口外・坂下門外・西丸大手門外に下乗下馬が、大手門内に下馬が詳細に記入され、特に中仕切門の前には「御三家下乗」、本丸御殿に入る御玄関前御門外には「公家下乗」が記入されている。

▼ 周辺曲輪

城門と橋、「御屏風蔵」「竹橋御米蔵」「御春屋」「御用屋敷」「小普請方」「作事方」「評定所」「伝奏屋シキ」「御畳蔵」「定火消」「火消与力」「御厩」が薄赤色で表示される。

【類例】所見なし

【画像】史料編纂所HP「所蔵史料目録DB」

<http://www.wap.hi-u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>より公開中

なお、冒頭の本図図示範囲を示すための基図としては、「分間懷宝御江戸絵図」（須原屋茂兵衛版、慶応三年刊行）のトレース図を用いた。

（松尾美恵子・杉本史子）